



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリマ・ユカギール語の所有を表す接尾辞 : -n' e/-n'
Author(s)	長崎, 郁
Description	特集 所有表現
Citation	北方言語研究, 2, 11-22
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49249
Type	departmental bulletin paper
File Information	02nagasaki.pdf



[特集 所有表現]

コリマ・ユカギール語の所有を表す接尾辞 *-n'e/-n'*

長 崎 郁

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員)

1 はじめに

コリマ・ユカギール語(シベリア北東部、系統不明)の接尾辞 *-n'e/-n'* は出名動詞を派生する接尾辞の1つで、名詞語幹(N)から「Nを持っている」などの意味を持つ自動詞を作るとされる(Krejnovich 1982:50, Maslova 2003:122; 212, 遠藤 2005:51)。この接尾辞は生産性が高く、テキストにおける使用頻度も高い。本稿の目的は、接尾辞 *-n'e/-n'* の用法をより詳細に記述することである。以下、まず2節において、この接尾辞を伴った形式の構文上の特徴を示した後、3節において所有物名詞の性質に関わる特徴について、4節において、情報構造に関わる特徴について述べることにする¹。

2 接尾辞 *-n'e/-n'* の構文上の特徴

コリマ・ユカギール語は接尾辞の添加を主要な形態法とする膠着的な言語で、基本語順はSOV。いわゆる *attributive possession* を表す方法は2つあり、所有者名詞(従属部)＋所有物名詞(主要部)の語順(*met emej* 「私の母」)、または、所有物名詞への所有者人称接辞付加(*emej-gi* 「彼女の母」、*-gi* POSS.3、所有者人称接辞は3人称のみ)による。品詞分類上、形容詞と明確に呼べるカテゴリーを持たず、「大小」「新旧」「色」「価値」といった性質を表す語は自動詞に属する。コリマ・ユカギール語では定動詞・直説法の屈折が自動詞と他動詞で異なるため、これを基準として、ある動詞が自・他のどちらなのかを判断することができる。

2.1 所有構文

接尾辞 *-n'e/-n'* (*-n'e* は重音節で終わる語幹および2つの軽音節から成る語幹に、*-n'* はその他の軽音節で終わる語幹に付く)が名詞語幹に付いた形式(N-PROP)は、動詞(自動詞)の屈折形式をとり、通常の自動詞と同じ環境に現れる²。N-PROPを述部とする構文(所

¹ 本稿は日本言語学会第142回大会のワークショップ「ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味論と構文論」における発表に基づくものである。本稿で用いるデータには、(1)ロシア連邦マガダン州セイムチャン村とサハ共和国ネレムノエ村で発表者が行った現地調査において得られた資料、(2)刊行されたテキスト集(Nikolaeva 1989, Maslova 2001)が含まれる。(2)からの引用には出典を示すことにする。

コリマ・ユカギール語の音素目録は次のとおり: /p, t, ʃ, tʰ[ʈe~ɕ], k, q[q~χ], b[b~β~w], d, ʒ, dʰ[tʂ], g, ʋ, r, m, n, nʰ[n], ŋ, l, lʰ[ʎ], w, j, i, e, a, o, u, ø/。

表記は基本的に音素表記を用いるが、ロシア語からの借用語にはキリル文字をラテン文字に転写した表記を用いることもある。

² 接尾辞 *-n'e/-n'* は共格接尾辞 *-n'e* と歴史的なつながりを持つと考えられるが、異形態の種類、および、他の接尾辞との承接順の点で両者には明らかな違いがある。したがって、共時的には

有構文) では、所有物が動詞中に、所有者が主語により示される。(1)～(3)に定動詞、副動詞、分詞の屈折形式をとった例を示す³。以下では屈折形式の違いに応じて、それぞれを叙述用法、副詞用法、連体修飾用法と呼ぶことにする。

(1) 定動詞 (叙述用法)

met kinige-n'-d'e.

1SG book-PROP-IND.INTR.1SG

「私は本を持っている」

(2) 副動詞 (副詞用法)

momu ʔaa kie-t', lukil-n'e-t.

longnose_sucker come-IND.INTR.3 arrow-PROP-CVB

「ロングノースサッカー (コイ科の魚) がやって来た、矢を持って」

(3) 分詞 (連体修飾用法)

tudel oozii-n'e-j vedro-k ket'ii-mele.

3SG water-PROP-PTCP bucket(Rus.)-PRED bring-PTCP.3

「彼／彼女は水の入ったバケツを運んで来た」

Maslova (2003:446) が指摘するように、所有構文では任意の項として、具格名詞により所有物の内容・実質を示すことができる⁴。

(4) *t'ol ʔoraa-die-le uo-n'e-ŋi.*

hare-DIM-INS child-PROP-PL.IND.INTR.3

「[彼らは] ウサギを子供として飼っていた」

2.2 所有物名詞の自律性

接尾辞 *-n'e/-n'* は派生接尾辞であるが、N-PROP の N が派生の後でも意味的な自律性を保

異なった接尾辞として扱うべきと判断される。

³ 例示に用いた略号・記号は次のとおり：- (接辞境界)、= (クリティック境界)、1 (1 人称)、2 (2 人称)、3 (3 人称)、ACC (対格)、ATTR (修飾)、CAUS (使役)、CLT (クリティック)、COM (共格)、CVB (副動詞)、DAT (与格)、DIM (指小)、E (挿入音)、GEN (属格)、IDEV (間接証拠)、IND (直説法)、INS (具格)、INTR (自動詞)、LOC (位格)、NEG (否定) PL (複数)、POSS (所有者)、PRED (述語)、PROP (所有)、PTCP (分詞)、PURP (目的)、Rus. (ロシア語の要素)、SG (単数)、TR (他動詞)。テキスト集からの引用のグロス は発表者による。

⁴ 具格名詞のこのような用法は、接尾辞 *-de/-d* (「N を得る」) による出名動詞でも可能である。

(i) *met paabaa-le terike-d-i.*

1SG elder_sister-INS wife-get-IND.INTR.3

「[彼は] 私の姉と結婚した (姉を妻として得た)」

持するという点で典型的な派生形式と異なっている。たとえば、N は以下の例に見るように、外から修飾することができる。(5)は連体詞⁵、(6)は動詞分詞形、(7)は名詞による修飾の例である。

(5) *irkin martl'u⁶-n'aa-l'el-ŋi.*

one daughter-PROP-IDEV-PL.IND.INTR.3

「[彼らには] 1 人の娘がいた」

(6) *omo-t'e nume-n'e-j* *ŋoromo*

good-PTCP house-PROP-PTCP person

「良い家を持った人」

(7) *ŋoromo nugen-n'e-t noj-n'e-t qodoo-t me=kimd'i-ŋi*

person hand-PROP-CVB leg-PROP-CVB be_lying-CVB CLT=fight-PL.IND.INTR.3

「[彼らは] 人間のような手と足をして、寝転がって戦っていた」

(Nikolaeva 1989(I):110)

また、以下の例に見るように、N-PROP の N ((8a)における *martl'u*「娘」) は指示詞 ((8b)における *taŋ*「その」) による照応の対象となることがある。すなわち、N は後続する文の中で意味的に取り出すことが可能である。

(8) a. *irkin martl'u⁶-n'aa-l'el-ŋi.*

one daughter-PROP-IDEV-PL.IND.INTR.3

「[彼らには] 1 人の娘がいた」

b. *taŋ titte martl'u⁶-gele k⁶diel-ŋin tadi-l'el-ŋaa terike-d-oon.*

that 3PL:GEN daughter-ACC wolf-DAT give-IDEV-PL.IND.TR.3 wife-POSS.3-ESS

「その彼らの娘を狼に嫁にやった」

2.3 所有構文と存在構文

所有構文では、所有者が場所性を持ち、所有というよりは存在を表すことがある。

⁵ 筆者は、コリマ・ユカギール語の品詞のひとつとして、「連体詞」(adnominals)を設定している (Nagasaki 2011:223-224)。連体詞とは、もっぱら名詞の前に置かれ、それを修飾する機能をもつ語である。意味的には基数を表すもの、「この」「あの」のように場面指示を表すものに加えて、「新しい」「古い」「ほかの」「もうひとつの」といった意味を表すものが含まれる。

⁶ 本稿で問題とする接尾辞の異形態のうち、*-n'e* は、*-l'el* (間接証拠)、*-nu* (不完了) などいくつかの接尾辞が後続する際に、*-n'ie* または *-n'aa* となる。*/e/ > /ie/* の交替は、*-n'e* の前の名詞語幹が前舌低母音 (*/e/* または */ø/*) を含む場合に、*/e/ > /aa/* の交替は名詞語幹が後舌低母音 (*/a/* または */o/*) を含む場合に起こる。高母音 (*/i/* または */u/*) はこの交替において中立的であり、どちらの交替が起こるかは、それぞれの語幹によって決まる。

- (9) *tudel t'ejd'ie fībit'e-n'-d'e mieste-ŋin ayt'ii-din qon-i.*
 3SG on_purpose dog_rose-PROP-PTCP place-DAT seek-CVB.PURP go-IND.INTR.3
 「彼はわざとノイバラの生えているところへ、(ノイバラの生えているところを) 探しに行った」

所有構文とは別に、存在動詞 *l'e-*を用い、場所を位格名詞、存在物を主語によって示す構文もあり、存在を表すにはこちらを使うことが多いという印象を受ける(10)。存在構文が所有を表すこともある(11)。

- (10) *t'ebil-ge lebejdii l'e-j.*
 valley-LOC berry exist-IND.INTR.3
 「谷にはベリーがある」

- (11) *met-ke kinige l'e-j.*
 1SG-LOC book exist-IND.INTR.3
 「私には本がある」

2.4 否定の所有構文と欠如を表す形式

叙述用法、副詞用法、連体修飾用法のうち、叙述用法、連体修飾用法の所有構文は否定が可能であり、欠如の意味を表す。しかし、副詞用法では否定の用例をテキスト中に見出すことができない。

- (12) *tudel el= buruj-n'e-j.*
 3SG NEG= fault-PROP-IND.INTR.3
 「彼は罪がない」

- (13) *taŋ el= terike-n-d'e ʔoromo pugeʔej-delle mon-i*
 that NEG= wife-PROP-PTCP person run_out-CVB.SEQ say-IND.INTR.3
 「その妻のいない人が(外へ) 走り出て言った」(Nikolaeva 1989(II):44)

副詞用法での否定の欠落を埋めるように、欠如を表す接尾辞-*t'uʔn* (常に否定のクリティック *el=*と共に現れる) が用いられる。この欠如を表す接尾辞は、叙述用法および連体修飾用法では用いられない。以下の副詞用法の例(14)と接尾辞-*t'uʔn* の例(15)を比較された

- (14) *met iidejnede t'aaŋ sakhar-n'e-t ooʔaa-nu.*
 1SG sometimes tea sugar(Rus.)-PROP-CVB drink-IPFV:IND.TR.1SG
 「私はときどきお茶を砂糖入りで飲む」

- (15) *t'aaj el= sakhar-t'uʔn ooʔe.*
 tea NEG= sugar(Rus.)-ABES drink:IND.TR.1SG
 「[私は] お茶を砂糖なしで飲んだ」

ただし、接尾辞-*t'uʔn* は、派生であれ屈折であれ、いかなる接尾辞も付加することができず、常に語末に位置するという点で屈折接辞的な性格を持つため、形態論的な位置づけとしては、接尾辞-*n'e/-n'*との並行性を示さない。

3 所有物名詞の性質

接尾辞-*n'e/-n'*は人称代名詞、指示代名詞、固有名詞、位置的關係を表す名詞（前後、上下など）には付かない。また、定の名詞にも付かない。これらを除けば様々な名詞に付くが、名詞の意味的な性質に従って、以下に述べるような意味上・用法上の特徴が観察される。

3.1 身体部分、属性、モノの部分

身体部分、属性のような典型的な譲渡不可能所有物の中でも、特に普通所有物（角田 2009）を表す名詞、あるいはモノの部分を表す名詞は修飾語を伴って用いられることが多い。以下の(16)～(19)に加えて、(7)も参照されたい。

- (16) ... *irkin aʔd'e-n'-d'e t'uuld'ii pulut-ke*
 one eye-PROP-PTCP ogre-LOC
 「...一つ目の鬼のところに（彼は着いた）」

- (17) *tudel omo-t'e niʔie-n'e-j.*
 3SG be_good-PTCP soul-PROP-IND.INTR.3
 「彼は良い性格をしている」

- (18) *irkin kun'el n'aamalʔil-n'e-j.*
 one ten year-PROP-IND.INTR.3
 「[彼女は] 10 才だった」

- (19) *pulun-die ilekun aʔad'e-n-d'e jouje-n'-i.*
 old_man-DIM four mouth-PROP-PTCP net-PROP-IND.INTR.3
 「おじいさんは 4 つの口（入口）のついた網を持っていた」(Nikolaeva 1989(I):82)

また、普通所有物では、修飾語を伴わずとも、その豊かさや程度の大きさといった特異性が含意されることがある。

- (20) *pugelbie-n'e-* 「毛むくじやらである」 (<*pugelbie* 「毛」)、*t'iile-n'-* 「力が強い」 (<*t'iile* 「力」)、*ʔnme-n'-* 「賢い」 (<*ʔnme* 「心、知恵」)、*ped'e-n'e-* 「臭い」 (<*ped'el* 「匂い」)、*n'aat'e-n'-* 「鋭い」 (<*n'aat'e* 「刃」)、*iit'e-n'-* 「先端が鋭い」 (<*iit'e* 「先端」)、*qodo-n'e-* 「一杯である」 (<*qodo* 「中身」)、*ʔuʔnbe-n'-* 「脂っこい」 (<*ʔuʔnbe* 「脂肪」)、など

一方、身体部分でも非普通所有物ならば、このような所有物の特異性が含意されることはない。

- (21) *ayanpugelbie-n'e-j.*

beard-PROP-IND.INTR.3

「[[彼は] ひげがある」

- (22) *met jokor-n'e-je.*

1SG injury-PROP-IND.INTR.1SG

「私は怪我をしている」

3.2 衣服、人間・動物、その他のモノ

衣服、人間・動物、その他のモノなどの譲渡可能所有物では、単なる所有と言うよりは、所有物を現に所持していることを表す場合がある。より具体的には、衣服では(23)のように着用、人間・動物では(24)のように随伴、特に乗り物として使われる動物では(25)のようにそれに乗っていること、その他のモノは(26)のように携帯の意味となる。このうち、随伴や携帯の意味は副詞用法や連体修飾用法で多く見られる。

- (23) ... *naqaa omo-t'e rubakha-n'e-j=ie.*

very be_good-PTCP shirt(Rus.)-PROP-IND.INTR.3=CLT

「... [[この鳥は] とてもきれいな服を着ているね」

- (24) *ataqun uθ-n'e-t modo-l'el.*

two child-PROP-CVB live-IDEV:IND.INTR.3

「[[彼は] 2 人の子供と暮らしていた」 (Nikolaeva 1989(I):48)

- (25) ... *aas'e-n'-d'e erpeje-p-lek kel-l-e medej-ti-l.*

reindeer-PROP-PTCP Even-PL-PRED come-PTCP-INS be_heard-PL-PTCP

「... トナカイに乗ったエウエンが来るのが聞こえた」 (Nikolaeva 1989(I):88)

- (26) *taa terikie-die uge-n'e-t modo-j.*

there old_woman-DIM fish_wier-PROP-CVB sit-IND.INTR.3

「そこでおばあさんが釜（漁の道具）持って座っていた」（Nikolaeva 1989(I):60）

また、副詞用法では目的語との等位を表すこともある。特に(28)のように所有者が目的語と解される例は、所有者が主語により示されるという所有構文の定義を逸脱する点で特異である。

- (27) *met t'oŋoje n'umud'ii-n'-u-t min.*
 1SG knife axe-PROP-E-CVB take:IND.TR.1SG
 「私はナイフと斧を手にとった」

- (28) *met-kele uθ-n'e-t tinjide ket'ii-ŋaa.*
 1SG-ACC child-PROP-CVB here bring-PL.IND.TR.3
 「[彼らは] 私と子供（私の子供）をここへ連れて来た」

3.3 語彙化

譲渡可能か譲渡不可能かを問わず、一部の名詞からの派生には語彙化していると考えられるものもある。その多くは(29)のように名詞の内容に関連する状態を表すが、中には(30)のように動作を表すものも見られる。

- (29) *anɖ'e-n'*-「目が見える」(<*anɖ'e*「目」)、*uneme-n'*-「耳が聞こえる」(<*uneme*「耳」)、*iri-n'e*-「妊娠している」(<*iril*「腹」)、*joŋo-n'e*-「怒っている」(<*joŋo*「悪意」)、*ileje-n'*-「風が吹いている」(<*ileje*「風」)、*juu-n'e*-「煙が出ている」(<*juul*「煙」)、*igeje-n'*-「結ばれている」(<*igeje*「紐」)、*qoli-n'e*-「うるさい」(<*qolil*「音」)、*ŋŋrile-n'*-「書かれている」(<*ŋŋrile*「文字」)、など
- (30) *juut'e-n'*-「呼吸する」(<*juut'e*「呼吸」)、*uŋ-n'e*-「子供を産む」(<*uŋ*「子供」)、*onor-n'e*-「嘘をつく」(<*onor*「舌」)、*ŋr-n'e*-「叫ぶ」(<*ŋrul*「叫び声」)、*jalŋi-n'e*-「祈禱する」(<*jalŋil*「シャーマンの太鼓」)、*ajdaan-n'e*-「騒ぐ」(<*ajdaan*「騒ぎ」)、など

4 情報構造

叙述用法の所有構文の用例には、情報構造（主題・評言、内容疑問文の形成）の観点からいくつかの特徴が認められる。本節では、このような特徴を存在構文の用例と対照させながら見ていくことにする。

4.1 主題・評言

コリマ・ユカギール語には、主題を明示する形態的手段はないが、文頭に置かれた要素を主題と解釈できることが多い。また主題が文中に明示されないこともある。テキスト中の用例を見ると、所有構文はもっぱら所有者／場所が主題で、所有物／存在物が評言に含まれる場合に用いられている（以下、主題を和訳に下線で示す）。

- (31) *irkin pulut l'e-j. ataqun uo-n'e-j.*
 one old_man exist-IND.INTR.3 two child-PROP-IND.INTR.3
 「1 人の老人がいた。〔彼には〕 2 人の子供がいた」 (Nikolaeva 1989(I):78)
- (32) *irkid'e odu-pe kukujerd'ii-pe arqaa irkin jal'el-ge pugeme*
 once Yukaghir-PL kukujer-PL near one lake-LOC in_summer
modaa-l'el-ni. tan jal'el ninge-j ani-n'aa-l'el
 live-IDEV-PL.IND.INTR.3 that lake be_many-PTCP fish-PROP-IDEV:IND.INTR.3
nodo-n'aa-l'el.
 bird-PROP-IDEV:IND.INTR.3
 「かつてユカギールたちはククイェルの人々（エウエンの氏族）のそばの、ある湖
 にほとりに夏の間住んでいた。その湖にはたくさんの魚がいた、鳥がいた」
 (Maslova 2001:133)

同じような場合に、存在構文が用いられることもある。

- (33) *taat'ile titte n'ugere-ge embe-j tochka l'e-j.*
 then 3PL:GEN side-LOC be_black-PTCP spot(Rus.) exist-IND.INTR.3
 「それから、彼ら（ロングノースサッカーとカワカマス）の脇腹には黒い点がある」
- (34) *tii+taa modo-l, qonujii-t ejre-l oromo-pul-ge qanjs'e-pul*
 here+there live-PTCP roam-CVB walk-PTCP person-PL-LOC hunter-PL
l'e-l'e-ni
 exist-IDEV-PL.IND.INTR.3
 「（その）あちこちに住み、移動して歩く人たちのところには狩人がいた」
 (Nikolaeva 1989(II):4)

一方、テキストの冒頭で文全体が新情報である場合など、所有者／場所が主題とは考えられない時には、もっぱら存在構文が用いられている。

- (35) *oromo l'e-l'el rd'oo-l lebie-ge, pieter berbekin*
 person exis-IDEV:IND.INTR.3 be_middle-PTCP land-LOC Pieter Berbekin
mon-u-t.
 say-E-CVB
 「人がいた、中界（天界と下界の間の世界）に、ピエテル・ベルベキンという名の」 (Nikolaeva 1989(I):92)

- (36) ... *oromo-pul mon-ni, "tit-ke omo-t'e marqil'*

person-PL say-PL.IND.INTR.3 2PL-LOC be_good-PTCP girl
l'ie-l'el."

exist-IDEV:IND.INTR.3

「人々は言った、あなたたちのところに美しい娘がいると」

- (37) *von ott'o met-ke l'e-j.*
 there(Rus.) cup_made_of_birch_bark 1SG-LOC exist-IND.INTR.3
 「ほら、オッチョ（白樺樹皮製の器）を私は持っている」

以上のような場合、存在構文における主語（所有物／存在物）に焦点が明示されることも多い⁷。

- (38) *taŋ ʔʔjɪl'bul iri-de-ge ulegeraa-k l'e-l.*
 that mouse belly-POSS.3-LOC grass-PRED exist-PTCP
 「そのネズミの腹の中には草があった」(Nikolaeva 1989(I):48)

- (39) *taa irkin nume omnii-ge irkin margil-ek l'e-l'el-u-l.*
 there one house people-LOC one girl-PRED exist-IDEV-E-PTCP
 「そこでは、ある家の人々のところに1人の娘がいた」(Nikolaeva 1989(II):6)

- (40) *irkin gorod-ke pieter berbekin l'ie-l'el-u-l.*
 one town(Rus.)-LOC Pieter Berbekin exist-IDEV-E-PTCP
 「ある町にピエテル・ベルベキンがいた」

また、所有物／存在物が主題の場合も、存在構文が用いられている。

- (41) ... *uʔr-pe-p-ki taa nume-ge l'e-l'el-ŋi*
 child-PL-PL-POSS.3 there house-LOC exist-IDEV-PL.IND.INTR.3
 「彼の子供たちはそこに、家にいた」(Nikolaeva 1989(II):52)

以上をまとめると、存在構文は何が主題であるかを問わず用いられるのに対し、所有構文はもっぱら所有者／場所が主題である場合に用いられることになる。したがって、所有者／場所の主題化という観点からは、所有構文と存在構文の違いがはっきりせず、2つの構文の違いをより深く掘り下げるためには、他の観点も考慮に入れた比較が必要と考えられる。この点に関しては、今後の課題としてさらに用例の収集と分析を行いたい。

⁷ コリマ・ユカギール語では、自動詞主語に焦点があることを明示するために、主語名詞に述語接尾辞 (PRED) を付加し、さらに動詞を分詞形にする。ただし、固有名詞などでは PRED が現れず、主格のままとなる。

4.2 内容疑問文

テキスト中の用例では、疑問代名詞により所有物／存在物そのものの内容を問う場合には、常に存在構文が用いられており、疑問代名詞 (*leme*～*neme* 「何」、*kin* 「誰」) に *-n'e/-n'* が付いた所有構文が用いられたものは見られない⁸。

- (42) ... *kin-pe-lek* *l'e-ŋi-l* *juʔ-delle*
who-PL-PRED exist-PL-PTCP see-CVB
「... (彼らのところに) 誰がいるのか、見て」 (Nikolaeva 1989(I):22)

- (43) *lem-dik* *tit-ke* *l'e-l?*
what-PRED 2PL-LOC exist-PTCP
「何がお前たちのところにあるのか」

- (44) *nem-dik* *tii* *l'e-l?*
what-PRED here exist-PTCP
「何がここにあるのか」 (Nikolaeva 1989(I):96)

ただし、所有物／存在物の数、種類、性質を問う場合に所有構文を用いることはある。このとき、疑問詞的要素が修飾語として現れる。

- (45) *qamun* *foromo-n-ŋi,* *aas'e-n-ŋi ...*
how_many person-PROP-PL.IND.INTR.3 reindeer-PROP-PL.IND.INTR.3
「(彼らには) 何人の家族がいるか、トナカイがいるか」 (Nikolaeva 1989(II):34)

- (46) *leme-n* *opyt-n'e-jemet?*
what-ATTR experience(Rus.)-PROP-IND.INTR.2PL
「(お前たちには) どんな能力があるのか」 (Nikolaeva 1989(II):20)

- (47) *tudel* *godimie* *amun-n'e-j?*
3SG what_sord_of bone-PROP-IND.INTR.3
「彼はどのぐらいの身長があるか」

同じような場合に、存在構文およびその他の構文を用いることも可能である。

⁸ ツンドラ・ユカギール語 (コリマ・ユカギール語と同系で、地理的にはより北方で話される) については、Kurilov (2001) が *neme* 「何」に当該の接辞のついた例を挙げている。ただし、すべて不定の意味 (「何かを持つ」) であり、疑問の意味 (「何を持つ」) の例は見られない。

- (48) *tude-ge qamun todii-k l'e-l?*
 3SG-LOC how_many teeth-PRED exist-PTCP
 「彼女は何本の歯があるか」

- (49) a. *qodimie pajpe-k l'e-t-u-l?*
 what_sort_of woman-PRED exist-FUT-E-PTCP
 「(そこに) どんな女がいるだろうか」 (Nikolaeva 1989(II):8)
- b. *tet nugen qodimie?*
 2SG hand what_sort_of
 「あなたの手はどんな具合か」

したがって、さらに聞き取りによる確認が必要ではあるが、可能性としては、所有構文では修飾要素を置くことによって所有物／存在物の数、種類、性質を問うことはできるが、所有物／存在物の内容そのものを特別な情報として要求することはできないということになるであろう。存在構文は、それに対し、内容疑問文の形成における自由度が高いと言える。

5 まとめ

本稿ではコリマ・ユカギール語の所有を表す接尾辞 *-n'e/-n'* に関し、所有物名詞の性質による意味上・用法上の特徴、情報構造から見た所有構文の特徴を中心に述べた。所有物の譲渡可能性と「普通所有物」「非普通所有物」の区別は、接尾辞 *-n'e/-n'* の表す所有およびそれに付随する意味の広がりに関わっている。また、所有構文の使用には、所有者が主題である場合にのみ可能、および、所有物そのものの内容を問うことはできないといった要因による制限がある。このような制限は、存在構文との対照によってより明確に分かる。

参考文献

- 遠藤 史. 2005. 『コリマ・ユカギール語の輪郭 - フィールドから見る構造と類型』 名古屋、三恵社.
- 風間 伸次郎 1999. 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」 *Altai Hakpo*. [アルタイ学報] 9: 93-124.
- Krejnovich, E.A. 1982. *Issledovanija i materialy po izucheniju jukagirskogo jazyka*. Leningrad, Nauka.
- Kurilov, G.N. 2001. *Jukagirsko-russkij slovar'*. Novosibirsk, Nauka.
- Maslova, Elena. (ed.) 2001. *Yukaghir Texts*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Maslova, Elena. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York, Mouton de Gruyter.
- Nagasaki, Iku. 2011. Kolyma Yukaghir. Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. Tokyo, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa: 213-256.
- Nikolaeva, Irina. (ed.) 1989. *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I-II. Yakutsk, Yakut State

University Press.

Stassen, Leon. 2009. *Predicative Possession*. Oxford University Press.

角田 太作 2009[1999]. 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』東京、くろしお出版.

Tsunoda, Tasaku. 1995. The possession cline in Japanese and other languages. H. Chappell and W. McGregor (eds.) *The Grammar of Inalienability*. Berlin, Mouton de Gruyter: 566-630.

Propriative Suffix *-n'e/-n'* of Kolyma Yukaghir

Iku NAGASAKI

(ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

This paper discusses the characteristics of the propriative suffix *-n'e/-n'* in Kolyma Yukaghir. The suffix *-n'e/-n'* derives denominal verbs that roughly mean “have N.” The derived verb has three syntactic functions: predicative function (in independent form), adnominal function (in participle form), and adverbial function (in converb form). A derived verb sometimes has an existential meaning, “N exists.” The main points of this paper are as following:

- (1) The meaning of N (possee noun) concerns the syntax and the semantics of *-n'e/-n'*:
 - (a) With an inalienable possee noun, especially an “everyone”-type possee noun (Tsunoda 1995), *N-n'e/-n'* is usually used with a modifier, otherwise the derived verb indicates “have special (many, big, etc.) N.”
 - (b) With an alienable possee noun, *N-n'e/-n'* implies not only typical possession but also possession at that very moment, for example, “wear N,” “be with N,” and “carry N.”
- (2) As compared to the existential verb *l'e-* with locative noun, which sometimes implies the possession meaning, the usage of *-n'e/-n'* is pragmatically limited:
 - (a) The suffix *-n'e/-n'* is usually used when the possessor is treated as the topic, otherwise the existential *l'e-* verb is preferred.
 - (b) The suffix *-n'e/-n'* is not used when the information about the possee is requested; in such a case, the existential *l'e-* verb is preferred.

(ながさき・いく inagasaki@aa.tufs.ac.jp)